

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03211

研究課題名（和文）社会の複雑化・国家形成における葬送儀礼の機能と貢献

研究課題名（英文）The function and significance of mortuary rituals in the development of social complexity and early state formation

研究代表者

溝口 孝司（MIZOGUCHI, Koji）

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：80264109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本列島西半部・ブリテン島・中国黄河中流域の新石器時代から国家形成期の葬送儀礼関連資料を対象として、これに投影された親族組織・社会関係・社会戦略の復元をおこない、その成果を国家形成過程諸段階の社会の構造的性質と比較対比することを通じて、葬送儀礼の国家形成過程への関与と貢献の具体相を解明することを目的とした。先端的葬送考古学的研究と、すでに多大の成果をあげてきた日本における親族構造・親族組織の変容研究を有機的にリンクさせ、これら三地域における葬送儀礼の共通性と相違がどのような社会構造的ファクターと相関し、これら三地域の国家形成過程の進展にそれぞれにどのように関与・貢献したかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、今日の世界各地の文化・社会構造の基層を形成した国家形成期の様相とそこにいたる軌跡の特性を、それに関与した葬送行為の具体的内容の解明を基礎に明らかにした。日本列島、ブリテン島、中国黄河中流域を対象として行われたケース・スタディは、類似する社会構造／複雑性を有する社会において人類が死者をどのように葬り、そのことを通じて社会構造の維持再生産を媒介するかに見られる共通性を明らかにするとともに、それぞれの地域が置かれた地理的歴史的条件によって、葬送行為の様式に顕著な差異が生み出されたことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted to shed light on how mortuary practices contributed to the formation process of early states by investigating archaeological mortuary evidence and related informations collected from the western portion of the Japanese archipelago, the southern portion of the British Isles, and the Yellow river basin of China. By reconstructing kin-organization, social relations and social strategies adopted in the conduct of mortuary practices, this project revealed similarities and differences between the three regions of the world in terms of the contribution of mortuary practices to the trajectory of state formation.

研究分野：考古学

キーワード：葬送行為 国家形成 比較研究 考古学 日本列島 ブリテン島 黄河中流域

1. 研究開始当初の背景

国家形成過程研究の世界的研究動向の先端は、社会システムの複雑化に関連する諸部分システム(サブシステム)個々の変容過程復元と、それらの間のフィードバック関係変容の復元を総合することにフォーカスし、様々な成果を生み出している。しかし、それらを駆動した実態である行為主体の思考・行動が上記サブシステムの機能、またそれらの間のフィードバック関係にどのように貢献し、それらを媒介したのかについては、一部の研究を除き十分な注意が払われていないのが現状である。本研究では、それを主催する個々人の行為の戦略性、それに参加する人々におけるその効果にアプローチしやすい「葬送儀礼」という行為・資料単位に着目し、そのような国家形成過程研究の問題点を解決することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、日本列島西半部・ブリテン島・中国黄河中流域の新石器時代から国家形成期の葬送儀礼関連資料を対象として、これに投影された親族組織・社会関係・社会戦略の復元をおこない、その成果を国家形成過程諸段階の社会の構造的特質と比較対比することを通じて、葬送儀礼の国家形成過程への関与と貢献の具体相を解明することを目的とした。

先端的葬送考古学的研究と、すでに多大の成果をあげてきた日本における親族構造・親族組織の変容研究を有機的にリンクさせ、これら三地域における葬送儀礼の共通性と相違が、どのような社会構造的ファクターと相関し、これら三地域の国家形成過程の進展に、それぞれにどのように関与・貢献したかを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

研究第一段階として、上記の各地域、A)日本列島、B)ブリテン島、C)中国黄河中流域の各地域につき、a)埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容過程の復元、b)親族構造・組織の変容過程の復元を行った。第二段階として、a・b 両者間の通時的相関性・共変動の有無と画期の析出を行った。第三段階として、そのような過程の細部と画期の内容を、同時代社会システムの具体像、すなわち社会の複合性・複雑性の内実、交換システム、ネットワークの内容と空間的広がり等と対比した。

そのような作業から析出された各地域の特徴性を、ひるがえって葬送儀礼の細部、すなわち行為の具体的様相、それらに動員された様々な資源の象徴性と対比し、これら三地域の国家形成過程の進展に、葬送儀礼がどのように関与・貢献したかを分析検討した。

4. 研究成果

A)日本列島

日本列島については、弥生時代については、主に西日本地域を対象とし、北部九州地域の背振山地周辺に発達した甕棺葬を主体とする墓地、関西地方を中心に発達したいわゆる方形周溝墓を主体とする墓地に焦点を絞り、検討した。弥生時代から古墳時代への過渡期、古墳時代については前方後円墳分布ホライズンから適宜資料を選択した。

a)埋葬プロセス：弥生時代に関して、北部九州と関西地方は、その葬送習俗の物質的表象・遺存物の顕著な相違から、これまで本格的な埋葬プロセスの比較検討の対象となることがなかった。そのことを念頭におき、まずは埋葬容器等の相違は括弧入れして、純粋に墓地空間構造形成過程の復元と、空間構造が必然とした空間体験の復元をおこなった。その結果は、意外にも、両者の空間構造形成過程は、弥生時代中期(=弥生Ⅱ～Ⅳ期)においてはよく類似しているというものであった。すなわち、北部九州においても、関西地方においても、墓地空間構造は弥生期から 期には列状空間の形成を指向しつつ進行する。弥生 期後半から 期になると、北部九州においては少数の甕棺が系列的に小群形成を指向する傾向、関西地方においては個々の方形周溝墓において埋葬施設(主に木棺)がやはり意図的に隣接設置を指向する傾向、後者においては方形周溝墓自体が前代の列形成指向から小群形成指向へと移行する場合も見られる。これら、両地域で並行的に進行する事態は二つのことを表している。X)墓地空間性の身体体験としては、比較的大規模な集団の共/協同的身体体験から比較的小規模な集団の時間的系譜的連続性の想起にフォーカスした身体体験への移行、Y)葬送儀礼における表象・確認の対象となる組織体については、無時間的かつ平等的で、比較的大規模な組織から、系譜的時間的深みをもち、小規模で、(副葬品や埋葬施設構造・規模などからみて)成層的分化を含みこむ比較的小規模な組織への移行である。

以上をb)親族組織の構造・組織の変容と対比すると、これらの変容は、西日本一円で進行した水田稲作農耕の定着と発展に促された人口の急速な増大、地域集落システムの急激な変容と中心地的大型集落-衛星的小型集落の分化、それに対応する双系的継承を基盤とした広域出自集団(クラン的出自集団)ネットワーク(ソダリティを基盤とする)の形成、そして、それら内部におけるリネージ単位のメンバーシップの厳格化と対応する、と想定された。

これが、弥生時代後期(弥生 期)となると、a)埋葬プロセスに関しては、明瞭に区画された墓域中に、乳幼児を含む一定の人数が埋葬される、b)その内容は、歯冠計測値の統計的類似度分析による血縁関係の有無の判別に依拠した親族組織復元によれば同一世代の血縁親族とその早逝した子供であると推定される場合が多いことが判明する。これは、人類学的にはクラン的出自集団の中でリネージ程度の規模の集団を単位とする内部分化と成層化が生じる、として記述できるが、これに対応する社会システムの様相としては交換・物流システム、ネットワークの急速な広域化があげられる。物質文化においては祭祀行為に用いられる物財のセットの形式化・スタイル的洗練とともに、それを共有する地域の段階的の広がりが確認される。これは、生活世界全般の安寧を祈願する祭祀から死者・祖先祭祀への移行過程とも相関する。

以上については、個々の地域統合体間の広域物財・交換ネットワークの発達と統合体個々のそれへの依存度の上昇により、ネットワーク維持のための相互交渉パートナーの固定と、相互交渉の物的媒体の高度の形式化が機能的に要請されるようになったこと、それには、パートナー単位の系譜の固定化(祖霊系譜の形式化)が機能的に適合的であったこと、が大きく関わっていることを推測した。そして、このようなネットワークの維持に、軍事力の行使によるパートナー単位の系列化が不可能であったために、祖霊祭祀の共有を基盤とする祭式の共有化と急速な形式化・誇張が進展し、いわゆる古墳に象徴される祭祀文化複合の生成とモニュメント化志向へとつながったと結論づけた。

B) ブリテン島

ブリテン島に南部地域については、紀元前 3000 年紀前半から紀元前 2000 年紀初頭まではいわゆるロングバロー(Long Barrows)と呼ばれる長台形の墳丘に石室、木室など多様な埋葬施設を設けて、後者については葬送行為の過程の最後に着火するなど、関連する葬送行為も非常に多様である。しかし、基本的に、個々のバローがある種の共同墓地であること、しかしその性格は、遺骸の安置場というよりも連続的な形式化された行為の場(ある種の<儀礼的>パフォーマンスの場)であること、そこでは年齢・性別区分を基礎とする社会カテゴリー区分が、生者と死者との接触に媒介されて確認・再生産されていたことは、先行研究が明らかにしてきたところである。

これに対して、紀元前 2000 年紀には、大陸より青銅器文化が導入されるとともに、墓制においても、ロングバローの構築・利用が停止し、変わって(墳丘形態に様々なバリエーションはありつつも)基本的に円形墳を採用し、その中に個人墓を収めるラウンドバロー(Round barrows)墓制と、いわゆるビーカー土器と銅製/青銅製短剣・アーチェリー関連アイテム(弓矢、石製手首ガードなど)により構成される副葬品セットに特徴付けられる体系へと変遷する。そして、紀元前 1000 年紀(青銅器時代後期)にはさらにこれが火葬習俗に取って代わられるとともに、考古学的に確認可能な埋葬そのものが量的に減少する。そして、ローマ帝国属州化以前の鉄器時代になると、ローマ帝国域製の様々な器物やワイン飲用関連の様々な器物(いわゆるワイン運搬用土器(アンフォラ)や様々な関連飲用器・食器)を副葬する個人墓が統合領域の中心地的前都市の大型集落近傍に出現する。

a)埋葬プロセスの観点からこのような変遷を整理すると、

新石器時代：一定の共/協同性の表象としてのモニュメントを<場>としての反復的な死者との交流(葬送後の死者との交流の継続)。

新石器時代末~青銅器時代前半：個別埋葬、円墳における個別埋葬の反復。また、円墳は、しばしば列状に配置される。二つの列があたかも競争する如く、平行して反対方向に形成されて行く例などもある。

青銅器時代後半：火葬の導入と考古学的に確認可能な埋葬の減少・

鉄器時代：威信財的外来アイテムを含むエリート墓の出現(墳丘などのモニュメント的構築物が認められない)。

以上のような流れとなる。

以上を b)親族組織の構造・組織の変容と対比すると、これらの変容は、草創期の混合農業における、一定地域に散居したクラン的出自集団の共/協同性の確保の必要性(新石器時代) 生業における牧畜依存の卓越と、大陸との交渉の増大に伴う威信財入手ネットワークへのアクセスをめぐる競争と男性優位継承システムの創発と系譜意識の形式化(新石器時代末~青銅器時代前半) 明確に区画された農地の広がりに反映される農耕社会の安定に伴う物流の増大に促された社会の複合性の増大に対する、葬送における社会成層のイデオロギー的隠蔽(さらなる検討を必要とする)(青銅器時代後半) 拡張するローマ帝国システムの文化経済影響圏拡大に伴う地域政治統合体の成長と、増大する統合体内外の社会交渉の調整者としての首長の析出(鉄器時代)という流れに整理できる。

以上については、ことに鉄器時代については、日本列島の軌跡と類似する。ローマ帝国の膨張に刺激された個々の地域統合体間の広域物財・交換ネットワークの発達と統合体個々のそれへの依存度の上昇により、ネットワーク維持のための相互交渉パートナーの固定と、相互交渉の物的媒体の高度の形式化が機能的に要請されるようになった。このことが、ブリテン島においてはワインの大量消費という日常的交渉場面の物的媒体を、交渉ノード(結節点)としての首長の葬送行為にも持ち込むという選択を促したと理解できる。しかし、日本列島の場合と異なり、ローマ帝国とその政治・物流ネットワークとのチャンネルがブリテン島南海岸中部、東部テムズ

川口～イーストアングリア地方、ヨークシャー州海岸部など複数存在したことから、日本列島のような広域ネットワークの一体的組織化（日本列島におけるチャンネルが北部九州地域にほぼ限定）が進展せず、結果として、地域首長連合による広域複雑首長政体が複数成立することになったことに、古墳的大規模モニュメントの築造にこの地域の社会の再生産が依存することのなかったことの要因を求めた。

C) 中国黄河中流域

中国黄河中流域については、その定義的カテゴリー（複雑首長制社会もしくは初期国家社会）については議論があるものの、広域に作用域を広げた複雑政体としてのいわゆる商代後期の中心地的都市的超大型遺跡、安陽殷墟西北岡墓地における葬送行為に焦点を合わせ、それ以前の時期の葬送儀礼とそれとを比較する手法で検討を行った。新石器時代後期（紀元前 3000 年紀）には、おそらく一定の上位層が出自集団ごとに墓域を形成し、（これも推測となるが）部族的組織（複数のクランの出自集団の緩やかな統合体）のエリートの集合墓地とでも記述できる性格の墓地が統合体の中心地的大型集落に形成された。いわゆる二里頭期（3000 年紀末～紀元前 2000 年紀中頃）になると、考古学的に確認された墓葬の数が少なくなるが、それに対応するエリートの墓葬の析出現象は確認されていないのが実態である。いわゆる商代前期（二里岡期）（紀元前 2000 年紀中頃）には同様な状況が続き、中商期（洹北商城）（紀元前 1400 年前後）を迎えて、ようやくエリート層の墓葬の実態が明らかとなってくる。本段階の墓は、「二層台」（新石器時代末にはすでに存在）と呼ばれる二段断面の墓坑底に、場合によっては木室を設けて、膨大な副葬品とともに遺骸を埋葬し、二段墓坑の一段めに副葬品とともに「殉葬者」を葬るという定式がパターンとして認められる。商代後期（殷墟期）（紀元前 1200 年代中頃～紀元前 1000 年代中頃）になると、墓坑底へと下降するスロープを墓坑四面それぞれに設ける最高ランクの墓（規模も非常に大きい）、正面と裏面に設ける第二ランク（規模は第一ランクに劣る）、正面のみに設ける第三ランク（規模は第二ランクに劣る）、スロープを設けない第四ランク、そのさらに下位に小規模な二層台墓、単純な墓坑構造の墓という成層構造が顕在化する。

a) 埋葬プロセスの観点からこのような変遷を整理すると、

新石器時代後期：個々の出自集団における上位層の析出とそれらの集合としての部族的地域統合単位における上位層墓地の形成に表象される共／協同性準拠の成層化。

二里頭期～二里岡期：新石器時代末の状況の中から埋葬されるエリート層の絞り込みが進行。

中商期：エリート墓葬の荘厳化（墓坑構造、副葬品、「殉葬」の開始）

殷墟期：エリート墓葬の荘厳化のさらなる進行と明瞭な成層ランク・システムの生成。

以上のような流れとなる。

以上を b) 親族組織の構造・組織の変容と対比すると、双系継承的傾向性と男性優位の未確立を特徴として共同体的平等性を保存しつつ地域統合体ごとに成層化が進行する段階（新石器時代後期）定式的埋葬行為の対象となる人々（エリート層）の絞り込みが進行するとともに、行為とその物的表象の荘厳化・形式化が進行する段階（二里頭・二里岡・中商期段階）おそらく統治世界観の急速な整備と関連する墓葬形態の成層ランク・システム化、という流れに整理できる。男性優位の継承への転換は新石器時代末葉の中で急速に進行し、殷墟期には、最高首長配偶者姻族＝支配エリート層の競争的傾向と、婚姻戦略による地域支配ネットワークの拡大戦略の複合という、日本古墳時代中期～後期と類似した様相がうかがえるようになる。

このような過程の進行と並行して支配的世界観（方位ごとに社会再生産・支配イデオロギーに関連する意味を割り振る）の形式化が進んだことも殷墟期最上位墓葬の東西南北方位へのスロープ布置などにより明らかである。このように、黄河中流域では、男性優位化・男系直系継承観念の発達と、最高首長に配偶者を供給する姻族エリート層の競争によるジェンダーをめぐる支配イデオロギーの発達と上述のような世界観の定式化の複合によって、社会関係を広域に覆う成層的世界観・統治イデオロギーが葬送儀礼に媒介されて形成・定式化されたものと考えられる。

D) 総括

本研究は、以下のことを明らかにした。

- A) 国家形成への軌跡の重要なエピソードとしての初期農耕社会からその定着発展期において、葬送行為は、人口増大に伴うクランの出自集団の組織的維持、新たに形成される交流交渉ネットワークの維持再生産・それに伴い生成する地域統合体の維持再生産の媒介として、共／協同性を様々な形で表象する指向性を発現するという共通性をみせる。
- B) 様々な＜外部＞との交渉の増大と上記の傾向性の増大によっていわゆる＜威信財経済＞的傾向性が創発するのと相関して、葬送行為は上位層／エリート層の系譜的連続性の表象とそれらの隔絶性の表象へとその傾向性を変容させる。これにおいても分析対象三地域においてその発現容態は異なるものの、基盤にある行為形式の指向性は一致している。
- C) 国家形成段階においては、社会システムの複雑化のメカニズム・規模、それらを媒介するネットワークの性格に応じて、葬送行為のフォーカスがモニュメント化（日本）外部エリート文化（ワイン飲用など）への独占的アクセス表象（ブリテン島）社会関係を体現する世界観表象の物象化（黄河中流域）へと分化する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mizoguchi Koji, Uchida Junko	4. 巻 92
2. 論文標題 The Anyang Xibeigang Shang royal tombs revisited: a social archaeological approach	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Antiquity	6. 最初と最後の頁 709 ~ 723
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15184/aqy.2018.19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Mizoguchi Koji	4. 巻 33
2. 論文標題 Making Sense of Material Culture Transformation: A Critical Long-Term Perspective from Jomon- and Yayoi-Period Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of World Prehistory	6. 最初と最後の頁 1~23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1007/s10963-020-09138-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 溝口孝司
2. 発表標題 Mortuary Strategies of Late Shang Kings: Correlating Evidence from the Xibeigang Royal Cemetery with Related Evidences
3. 学会等名 殷墟科学発掘90周年記念大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mizoguchi, K
2. 発表標題 The centralization and hierachisation of inter-communal relations constituted by island topography: the case of Japan
3. 学会等名 European Association of Archaeologists Annual Meeting 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mizoguchi, K
2. 発表標題 Making sense of material culture transformation: a critical long-term perspective from Jomon and Yayoi period Japan
3. 学会等名 European Association of Archaeologists Annual Meeting 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	舟橋 京子 (石川京子) (Funahashi Kyoko) (80617879)	九州大学・比較社会文化研究院・准教授 (17102)	